

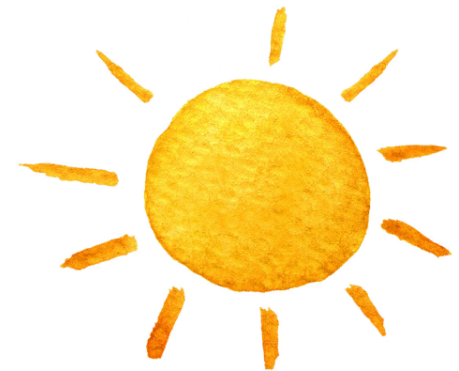
コロナウイルスの今だからこそ
生き方と働き方を考えるために
読んでおきたい昔話

LIFE DESIGN LAB

戸田 輝

エドとビルの話

むかしむかしあるところに、ひなびた村があった。
そこはたいそう暮らしやすかったが、一つ大きな
問題があった。というのも、その村では雨が降ら
ないと水が手に入らなかったのだ。



この問題を解決するために、長老たちは村に毎日水を運んでくる仕事を引き受けてくれる人間を募ることにした。そして、名乗り出た二人と契約を交わした。長老たちはたとえ一人でも競争相手がいれば、価格を安く抑えることができ、また一方に支障があったときにも水に困らないですむと考えたのだ。

契約を勝ち取った二人のうち一人はエドという男だった。エドは契約が決まるやいなや外に飛び出し、ブリキのバケツを二つ買ってきて、1マイル離れた湖に向かって駆け出し、せっせと水を運び始めた。こうして毎日朝から晩まで2つのバケツで水を運び続けたエドのもとには、すぐにお金が舞い込んできた。



エドは運んできた水を、村の人たちが作った大きなコンクリートのタンクに流し込んだ。毎朝エドは村のだれよりも早く起き、必要なだけの水がいっつもタンクの中にあるようにしなければならなかった。つらい仕事だったが、お金が入ってくるのがうれしかったし、この契約を勝ち取った2人のうち1人になれたことを喜んでいた。



もう一方のビルは、契約を結んだあとしばらく村から姿を消した。数カ月が過ぎてもビルは戻ってこなかった。エドは喜んだ。競争相手がいなくなったからだ。エドは水の代金を独り占めしてほくほく顔だった。

ビルにはバケツを2つ買ってエドと競うつもりはなかった。その代わりにビジネスプランを立て、会社を起こした。そして、4人の投資家を見つけ、実際に現場で仕事をする社長を雇い、6カ月後、建築作業員を引き連れて村に戻ってきた。1年後、ビルの会社は村と湖を結ぶステンレスのパイプラインを完成させた。



パイプラインの開通を祝う式典の席上で、ビルは自分のところの水はエドが運ぶ水よりもきれいだとみんなに告げた。エドの水に土がまじっていると文句を言う村人たちがいることをビルは知っていたのだ。

ビルはまた、自分の会社は1週間に7日、24時間休みなく水を供給できると告げた。エドは週末は働かなかったので、水が運ばれてくるのは月曜から金曜までだった。そのあと、ビルは、より高品質で信頼性のあるこの水の供給サービスに対する料金をエドの4分の1にすると発表した。村人は大喜びでビルが作ったパイプラインの蛇口に飛びついた。

ビルとの競争に勝つためにエドはすぐに水の料金を4分の1に下げ、新たに2つのバケツを買った。そして、4つのバケツすべてにふたをつけて水を運び始めた。また、サービスの質を高めるために、2人の息子を雇い、交代で夜や週末も水を運ぶことにした。

息子たちが大学に進むために村を出るとき、エドは息子たちにこう言った。

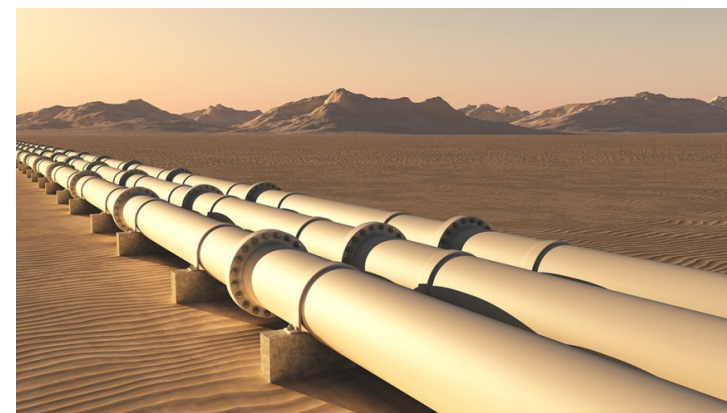
「はやく帰って来るんだ。このビジネスはいつかお前たちのものになるんだから」

でも、大学を終えた2人の息子はどういうわけか村には戻ってこなかった。

その頃にはエドは人を雇うようになっていたが、それと同時に組合の問題もかかえるようになっていた。組合は賃上げと福利厚生の実を要求し、さらに、組合員は一度に1つのバケツしか運ばなくていいようにしてほしいと求めてきた。



一方ビルは、もしこの村に水が必要ならば、ほかの村だって必要としているに違いないと考えた。そして、ビジネスプランを書き直し、世界中に散らばる未開発の村を訪れ、自分が考え出した高速、多量、安価、高品質の水の供給システムを売って歩いた。



ビルの儲けはバケツ**1**杯分の水につきわずか**1**セントだったが、毎日の供給量は相当な量に達した。だから、ビルが実際に身体を動かして働かなくても、世界中で何百万人という人が**1**日にバケツにして何杯もの水を使い、そこから入るお金がすべてビルの銀行口座に流れ込んだ。

ビルは村に水を運ぶパイプラインを建設すると同時に、自分のところにお金を流し込むパイプラインも作っていたのだ。

ビルはそれからずっとしあわせに暮らし、エドの方はずっと必死で働き続け、お金に苦勞する生活を続けましたとさ。

質問

- あなたの生き方・働き方はエドとビルのどちらに近いですか？
- エドとビルのどちらを目指したいですか？
- 今できることは何ですか？

夢ではない

- エドとビル、どちらになりたいと思ったとしてもそれは夢ではありません。
- エドやビルに近づく方法があります。それを実践している人たちが私たちのすぐそばにもいます。
- 「知っているか・知らないか」「やるか・やらないか」で人生は大きく変わります。
- どんな人生でも「選ぶ権利」を全ての人が持っています。

作成者

戸田 輝

LIFE DESIGN LAB

起業・副業スクール 代表

戦略・マーケティング コンサルタント